

紹介

R・ペルヌー著
橋口倫介訳

『テンプル騎士団』

本書の表題であるテンプル騎士団については、邦語文献に乏しく、以前は訳者橋口倫介氏に二著を見るのみであった。最近相次いで二冊の新刊が出され、そのいずれもが一般読者にも接し易い新書版であることは、従来この分野に興味を持たれることが少なかった我国にあつては、非常に喜ばしいことである。一冊は昨年末に出た篠田雄次郎著『聖堂騎士団』（中公新書）であるが、これについては別稿（『史林』六〇巻三号）でも紹介した如く、必ずしも問題がない訳ではなく、それに踵を接する形で本書が出されたことは、甚だ時宜を得たものであると思われる。

章別構成は、第一章 テンプル騎士団の起原、第二章 組織と日常生活、第三章 建築、第四章 その偉功、第五章 行政家と銀行家、第六章 テンプル騎士団事件——逮捕と訴訟——、第七章 後世の毀誉

褒貶、からなっており、この構成自身は本主題に関する研究書の一般的傾向に沿っているように思われるが、建築に関して一章を設けているのは他の邦語文献に見られぬ特色である。そして、その章の中では、ジゾル城に関して、「全く歴史的根拠のない非常識な作り話が生まれていた」（四七頁）と簡単に片付けていることなど、篠田氏上掲書と比べる時、興味深い。

著者についての紹介は「訳者まえがき」に譲るが、そこにも述べられている如く、国立文書館の古文書学者として、諸史料を駆使したその実証的厳正さは高く評価し得る。史料に直接語らせる形で論述を進めて行くやり方は読者に安心感を与え、しかも騎士の日常生活や軍事行動の描写等には生彩があり、臨場感を伴う。一方で、叙述が興味本位に流れることには厳しく注意が払われており、こうした小冊子で読み物としての面白さと調和させる一つの好例と言える。従来神話や伝説に対する態度も明快である。

訳者橋口氏には騎士団やそれと関係の深い十字軍に関する多くの著書・訳書があり、現在得ることができる最適任の翻訳者であり

ることは言うまでもない。訳文はよくこなれていて読み易く、訳注も行き届いている。ただ、第四章の注8で、ペラギウス枢機卿をコンスタンチノープル総大司教としているが、彼は同地で教皇特使として働いたことはあっても、総大司教にはなっていないのではないだろうか（これについては、御本人に確認した所、再版の機会に訂正されるそうである）。固有名詞の表記や訳語等も概ね妥当であり、本シリーズに限っても、グルッセ『十字軍』、モリソン『十字軍の研究』と経るに従い、ほぼ確立したようである。今後、本書の用語法は、騎士団や十字軍の研究に際して一つの手本になるのではないかと思われる。

（新書判 一七一頁 一九七七年三月
白水社 五五〇円）
（八塚春見 京都大学大学院生）

金子晴勇著

『宗教改革の精神』

——ルターとエラスムスとの対決——

本書はエラスムスとルターとの自由意志をめぐる論争を扱った、我が国で最初の文献である。宗教改革は「エラスムスが卵を

生み、ルターが孵化した」といわれるように、宗教改革に対するエラスムスの貢献はこれまで人口に膾炙されてきたにもかかわらず、その思想を検討することはほとんど行われなかった。他方、ルターに関する研究の蓄積と進展については改めて述べるまでもなからう。

このような研究の不釣合が、本書を著わすに至った著者の主要な動機ともなっているのはいうまでもない。ただ、そうはいっても本書は単なる啓蒙書の段階に留まるものではない。著者は「論争」をヒューマニズムの偉大さと悲劇性という人間の歴史の中で常にその功罪を問われてきたスケールの大きな尺度をもって論考している。まず、「論争」は両者のヒューマニズム観の相違に基いている。はじめの二章は、両者の人間像の比較と「論争」のクロノロジーであり、次にその思想的意義の検討が続く。第三章は、古典古代とキリスト教の伝統との関わりあいである。エラスムスの「源泉に帰れ」の精神が望んだのはキリスト教の「修復」であり、ルターの「信仰のみ」の信念が求めたのはその「新生」である。第四章では、原罪と自由意志の意味に関して

両者のヒューマニズム観の相違が検討される。エラスムスのそれは「理想主義的」であり、現実の中で障壁にぶつかり、自己崩壊する危険を孕む。第五章で著者の立場が明らかにになる。エラスムスの危機を乗り越えるものは、ルターの神概念である。人間の自由意志の無力さを悟ったルターが説く「試練をうけた神学」は、ヒューマニズムの不可避免的悲劇性を克服する道を示してくれるであろう。終章はむしろ著者のキリスト教擁護論である。現代におけるヒューマニズムの不毛を救うものとして、宗教改革の精神の現代的な意義が力説される。以上の内容紹介からも察せられるように、著者の信念が強く叙述の前面に押し出されているために、本書はポレミックな側面をも併せもつ。

本書の論理構成の要素となる基礎的な観念と主張は、原典に基く著者自身の独自の思索のうちから得られたのではなく、いくつかの研究書に従って再構成されたものが多いと思われる。巻末に参考文献表が付けられているが、それは現在、入手しうる邦文の関連研究を網羅し、また最もポピュラーで基本的な欧文研究を偏りなく集めている。

紹介者は掲げられた文献のすべてに接したわけではないが、これらは著者によって極めて有効に、そして発展的に処理されているといえよう。ただ、少し気にかかるのは、これらの素材の扱い方である。素材となる研究の主張の当否、素材間の主張の対立が十分に吟味されていないように思われる。一例として、ゲルダーが十六世紀初頭の思潮分析に利用され（五七頁）、後でトレルチが宗教改革とルネサンスの対比のために用いられる（一三六頁）。ゲルダーはルネサンスと宗教改革を前者の下に統合的に捉えようとしているのに対し、トレルチは宗教改革の「社会学的推進諸力」を評価して、両者を峻別する。引用箇所での論点は異なるが、両研究の主張を入れかえて用いれば、本書の論述の進む方向は、幾分、違ったものにならざるをえないのではあるまいか。

次に、論理を構成するときの著者の立場であるが、一読したとき、それに当惑しなければならぬ読者も多かろうと思われる。著者は「論争」をルター側に立って、神学という領域の中で論考する。「エラスムスの限界」（一三四頁）、「ヒューマニストの

錯覚」(一六五頁)等の表現は、著者の立場を明らかにしている。どちらの側に立つかは、窺極のところ、主観が決定する問題であろうから、ここではとりあげることはしない。しかし、視角に関しては、そこに神学というフィルターを通して事物をみる者と、歴史というそれを通してみる者との観察眼の相違という点で興味深いものがあると思われる。本書では、エラスムスは徹底して「キリスト教ヒューマニスト」「理想主義的ヒューマニスト」として理解される。彼が敬虔なキリスト者であることが、論争の意義を専ら神学的な観点から論考する方法を正当化する。そのとき、彼の「理想主義的ヒューマニズム」は人間分析の適確さで、ルターの「試練をうけた神学」に譲るべき点が多い。この論旨は本書の構成に不可欠な基礎概念をなすものであるが、そこに描かれるエラスムス像は、神学的な整合性が求められる余り、歴史的立像としては一面的であるという印象を拭うことができない。「論争」が行われた十六世紀とは、ヨーロッパが宗教の存在がアンジッヒな前提となる宗教社会から脱皮する糸口を見つけた時代である。従って、「論争」

の意義は宗教のあり方そのものの変容にも関わるのではなからうか。信仰に懐疑主義をもちこんだ「キリスト教ヒューマニスト」、平和と寛容を語った「理想主義的ヒューマニスト」は、宗教性の質においてルターに劣る点をもったとしても、その土俵をかえて考察すれば、また別の評価が与えられるであろう。その意味で、エラスムスが『自由意志論』を執筆するに至った動機、また一五三〇年のアウグスブルク帝国議会に向けての両者の姿勢等が、論述の中に組みこまれていないのは、紹介者にとって残念である。

以上、本書の内容を極く簡単に紹介しながら、コメントを加えてきたが、私見の提示に走りすぎ、やや紹介の枠をふみ越えたきらいがある点をおわびしたい。もちろん、本書が語る論理の大胆さと舌鋒の鋭さは、自己の直観のみを拠りどころとする単なるアジテーターの類いのそれとは明らかに一線を劃する。それは著者の深い洞察と学識に裏打ちされたものであり、将来、同様な課題を論じた研究が公にされたときにも、本書の存在意義を長く主張していくに十分な論理性に立っている。従って、本書は自

由意志をめぐるエラスムスとルターの論争を扱った我が国で最初の文献であることと併せて、二重の意味で好著と呼ぶにふさわしいと思われる。

(新書判 二〇五頁 一九七六年三月
中央公論社 三六〇円)
(永田諒一 京都大学大学院生)